

性起と修起

—真佛土と佛性の一考察—

大谷派 井上重信

一、はじめに

宗祖は「教行信証」真佛土巻に於いて『涅槃經』を引き、「一切衆生悉有佛性」義を尋ね、次いで『論註』の「性」の四義、即ち性起・修起説などから誓願に酬報する眞實報土の内実を明かす。曇鸞は、「願生偈」の「正道大慈悲出世善根生」を「莊嚴性功德成就」と名づける内実を『論註』に具さに説く。即ち淨土は眞如法性にかない性起した佛土であると同時に法藏菩薩修起の報土であつて、法性が顕現した性起の世界であることを明かす。此の性起と修起は何処までも必然的相即的關係として捉えられる。当稿は佛性義、就中この修性二起の關係等から眞佛土の内実を窺う試みである。

宗祖が、佛性に就いて信心佛性・涅槃佛性と説き、佛性を人間に内在するものという視点からではなく、性起をあと付ける修起⁽⁴⁾に焦点を置く如来の本願からの用きとして受け止めている点を注目したい。「性」の内容が本の義・積習の義・聖種性の義・必然不改の義の四義で明かされると、改めて佛性が如来による一切衆生救済の用き、大乘

の道理として確認される。そのように見た時、二十九種莊嚴の根本義・原理を表す「不虛作住持功德」が注目されてくる。「本願力にあいぬれば 空しくすぐるひとぞなき 功德の寶海みちみちて 煩惱の濁水へだてなし」と、「高僧和讃」が「不虛作住持功德」の内実を、阿弥陀佛の浄土は虚作ならざる本願力に住持せられた功德と明かす。それは法藏菩薩が永劫の積習によって成就する「在る如来」に決して留まることの無い「成る如来」として、因位の本願力（不虛作）に限りなく回帰して往く「修性一如」の菩薩行（住持）を顕すのであり、同時にそれは親鸞の生涯を貫徹する佛道（功德）であった。曇鸞大師の明かす性起と修起は、真如法性が真佛土として具体的に顕現する第一義の証文として前面に出される修起、即ち「成る如来」としての修起（因）が、「在る如来」としての性起（果）によって、又「在る如来」の性起（因）が「成る如来」の修起（果）によってその存在が証明されるという「因果縁起」、謂わば交互成就の關係にあることが領解されよう。

二、真佛土の義意

1、眞宗教義の起点としての「眞佛土巻」

宗祖は、『教行信証』『教巻』の冒頭で、

謹んで浄土真宗を案ずるに二種の廻向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の廻向について、眞實の教行信証あり。（以下『教行信証』の引文經典は凡て原漢文）

と顕し、又、『證巻』冒頭では（以下引文等の傍線は凡て稿者付す）

眞實證をあらわさば、すなはちこれ利他円満妙位無上涅槃の極果なり。すなはちこれ「必至滅度の願」よりい
てたり。（中略）往相廻向の心行をうれば、すなはちのときに大乘正定聚のかずにいるなり。（中略）しかれば

彌陀如来は如より来生して、報應化、種々の身を示現したまふなり。

と、まず眞宗の教相を判じ前四巻で衆生往相廻向の成就を明かす。後段の「しかれば……」以下には、如来・法蔵菩薩の還相廻向の意を開示する。眞實の教行信証四巻で一一の願が衆生に成就したことを見届けた法蔵菩薩が次に自身の誓願が成就する、即ち「必至滅度」という往相廻向の願果「無上涅槃の證」が次に還相回向（因）となつて衆生に用きあらわれる、誓願酬報の浄土を開顕するのが「真佛土巻」の義意であり、その内実を「性起と修起の關係」から尋ねるのが当稿の主題である。

2、「真佛土巻」の来意

「真佛土巻」冒頭に、

謹んで真佛土を案ずれば、佛はすなわちこれ不可思議光如来なり、土はまたこれ無量光明土なり。しかればすなわち大悲の誓願に酬報するがゆえに、眞の報佛土と曰うなり。すでにして願います、すなわち光明・寿命の願(6)これなり。

とあるが、真佛土は智慧といのちをあらわす光寿二無量の第十二願・十三願で成る法身・如来大悲の用きであり、此の内実は還相廻向の在り様を問うものである。換言すれば、十方衆生を以て佛自身と成さしめる用き、即ち十方衆生の上に佛を成就する根本願(7)の願意であり、法蔵菩薩が因位の積習を経てはじめて正覚を取つて誓願成就した事成が「誓願酬報」の真佛土であつた。

開華院法住師は『教行信証金剛録』(8)で、

この「真佛土巻」は其衆生の証果を得る處は此土にあらず、化土にあらず、眞實報土の証なりと顯はす此巻なり。故に上來教行信証真佛土の五巻の次第は、真佛土より顯はれたる眞實教の『大經』によりて、眞實行の名

號を説き顕し、その名號の謂れを聞いて深く信ずる眞實信によりて、眞實証を得、拝むところの佛は不可思議光如来なり、見るところの浄土は無量光明土なりとあらはすが、眞實五卷の次第なり。

と、衆生が証果を得るのは法蔵菩薩の誓願に酬報して成就した眞實の報土であると断じ、続けて『教行信証』前五卷が「真佛土より顕われたる」と、真佛土を眞實の教行證開顯の根本に据え、眞宗教義の骨格「往還二回向」を成立させる「真佛土卷」の重要性を示教する。「現生に於いて浄土の心に立つ信のあり方を問う」と言う親鸞の佛道觀から判じて、浄土眞宗立教開宗の根本聖典『教行信証』は「真佛土卷」から始まると領解されて然るべきなのである。

3、親鸞の佛身觀の確かめ

大乘佛教各宗の「法身・報身・應身」三身説を親鸞も用いるが此処では三身説の詳細は省く。但、法蔵菩薩の發願に酬報して法蔵自身が阿弥陀如来として成佛したという本願成就の主體的事實を領解する宗祖の佛身觀は、あくまで阿彌陀を「報身佛」とする思想で貫かれる。もとよりこの三身は一佛身の三面性を表したものであつて別個のものでない事は云うまでもない。

親鸞は『唯信鈔文意』⁽¹⁰⁾に、

法身は、いろもなし、かたちもましまさず。しかれば、こころもおよばれず。ことばもたえたり。この一如よりかたちをあらわして、方便法身ともうす御すがたをしめして、法蔵比丘と名乗り給いて、不可思議の大誓願をおこして、あらわれたまう御かたちをば、世親菩薩は、尽十方無礙光如来となづけたてまつりたまえり。この如来を報身ともうす。誓願の業因に酬いたまえる故に、報身如来ともうすなり。

と、宗祖の佛身觀が鮮明に述べられるが、注目されるのは前段で「いろもなし、かたちもましまさぬ」法身の方便

として報身如来を説き、その現働する如来の用きを述べているが、本来凡夫には覚知し得ない如来の用きをそのまま対象化せず、後段できちんと「かたちもいろもましまさぬ」法性法身に帰してあるところに親鸞教学の確かさと底の深さが見定められる。承前引文して「報身」の義意を確かめておく。(承前)

尽十方無碍光佛ともうすひかりにて、かたちもましまさず、いろもましまさず。無明のやみをはらい、悪業にさえられず。このゆえに、無碍光ともうすなり。無碍は、さわりなしともうす。しかれば、阿弥陀佛は、光明也。光明は、智慧のかたちなりとしるべし。

是れと略同じ宗祖の見解が『一念多念文意』⁽¹⁾にも表明されてある。聊か重複するが宗祖にとつての真佛が方便法身としての阿弥陀の報身であること、又方便の義意を確かめておく意味で敢えて引用する。

この一如寶海よりかたちを顕して、法蔵菩薩と名乗り給いて、無碍のちかひをおこしたまうをたねとして、阿彌陀佛と、なりたまうがゆえに、報身如来ともうすなり。これを尽十方無礙光佛となづけたてまつれるなり。

この如来を南無不可思議光佛ともうすなり。この如来を方便法身とは申すなり。方便ともうすは、かたちをあらわし、御なをしめして衆生にしらしめたまうを申すなり。すなわち、阿彌陀佛なり。この如来は、光明なり。光明は智慧なり。智慧はひかりのかたちなり。智慧またかたちなければ、不可思議光佛ともうすなり。この如来十方微塵世界にみちみちたまえるがゆえに、無辺光佛ともうす。しかれば、世親菩薩は、尽十方無礙光如来となづけたまへり。

先ず最初の傍線部分は、法身からあらわれた法蔵菩薩と、その誓願が成就して報身佛・阿彌陀如来となつた由縁が説かれる。此の如来を方便法身といい、方便の内實を語る。後半では佛智を微塵世界に遍満する不可思議光如来と言ひ表わす。無辺光佛・尽十方無礙光如来は、一切の衆生を悉く救済する佛の用き、即ち佛性であり、「微塵世界に遍満する」は畢竟「一切衆生悉く佛性の中に有り」の意に繋がるのではなかつたか。

4、光寿二願の内実

佛の慈悲を顕す第十三壽命無量の願の寿命は体、佛智を意味する光明第十二光明無量の願の光明は佛の用きを顕すが、佛そのものに体があるのではなく、あくまで佛の慈悲が発現する衆生の無量のいのちを体とし、その六道輪廻の衆生の無明の闇を破する光用を象徴するのが光寿二無量「撰法身の誓願」¹²であると解釈されよう。池田勇諦師は、

親鸞にとつては光寿無量の願は単に「撰法身の願」でなく、そのまま「撰衆生の願」であつたことにより、二願の成就是如来の自利利他成就にほかならなかつた。それを告げる「不可思議光如来・無量光明土」であることはまさしく本願成就の「佛・土」であり、それが共に「光明」で象徴されるところに、衆生にとつて自らの「無明の闇」を破せられる光として体験される佛土であることを示している。しかもその体験の釈尊における告白こそ、光明無量の願成就の十二光でなかつたか。であれば十二光はどこまでも照らされた者の感動であり讚嘆の表現として、十二光の一一の義はそのまま本願名號によびさまざまされた救済の内実、言いかえれば利益を告げるものと言えるであらう。¹³

と、不可思議光如来と無量光明土の内実を講説する。智慧の光明無量の願と慈悲の寿命無量の願は不二一如であり、無縁の大悲となつて衆生救済に用く交互成就の関係であることが此処からも窺える。

前に述べた通り教・行・信・証四巻は衆生往生の誓願が成就した内容であり、法蔵菩薩が衆生の成佛を見届け、その満足を得てのち今度は佛自身の成就を実現する報土を明かすのが「真佛土巻」なのであつた。佛自身の誓願成就是衆生の往生成就を必然的に伴うものであれば、佛土が何処かにあつて私が往く処と、謂わば対象化して考えるのと辻褃が合わなくなる。佛の成就を顕す撰法身の三願は、謂わば根本願である第十八願「如来に拠る衆生救済の用き」を具体化する大悲の願と考えられ、第十二・十三光寿無量の願が「真佛土巻」に標榜される所以が頷かれる。

したがって「光寿二願」は撰法身の願であると同時にそれは撰衆生の願でもあるという領解が成立するのである。付言すれば、「化身土巻」は、われらをよび覚まそうとする如来による衆生救済の用き「法の願」（第十二・十三・十七願）を、救済の対象である「機の願」（第十八・十九・二十願）に於いて宗祖自らが自證された文類と領解されよう。親鸞の三願転入の趣意を窺うとき、三願を順次わたり巡るといふ平面的思考でない事だけは確かである。

5、大悲の願の用き

「真佛土巻」冒頭に「大悲の誓願に酬報するがゆえに眞の報佛土というなり」とあり、「行巻」の冒頭、「しかるにこの行は、大悲の願より出でたり」と表わされてある。光寿二無量がなぜ大悲の願であるか。

善導が「光明名號をもて十方を撰化したまう。ただ信心をして求念せしむれば……」と表明する内実は一言で言えば「われらを光明で撰化し、名號を以て覚醒させる」如来の用き、つまり大悲なのである。如来による撰取という用きを光明を以て象徴し、名號を以て衆生を覚醒させる用きが光明名號であれば光寿二無量は正しく大悲の願である。この光明によって無明の闇から覚醒された相が信心であり、その信心によってはじめて如来の大悲によって撰取救済されるという、謂わば法が機に用き、機が法に転じられると理解されるのである。それが佛の誓願成就する、誓願酬報の真佛土であると領解されよう。次に「真佛土」の義意が「佛性義」を尋ねることで全うされることを確かめたい。

三、真佛土と親鸞の佛性観

1、「涅槃經」引意

親鸞はすべての衆生一人一人を体とする佛（大悲）の成就、即ち「真佛土」成立の根源を佛教の最高思想とされる「佛性」に求め、故に佛性論の根本經典である『涅槃經』を「真佛土卷」に多引し、「涅槃佛性・信心佛性」という親鸞独自の佛性観を展開して眞實報土の内実を開顕する。小川一乗師は『涅槃經』の主題は法身常住であり、そのことを知らしめるのが悉有佛性である。そこには法身常住としての佛性が説かれている。親鸞聖人は、その佛性と言う課題のためにここに『涅槃經』より多くの文証を列挙している。⁽¹⁴⁾と講説するが、親鸞は、無常・苦・無我・不淨なる虚仮の世間に生きる衆生を「唯佛是真」の真佛土に往生させ、常・樂・我・淨の無上大涅槃に至らせる用きを、「佛性」と見据えたのである。

然しながら親鸞は、佛に成る種・佛の本性とされる佛性が「一切衆生に悉く佛性有り」と言われるような意味で衆生に本来的に摂在するとは考えていないようである。その根拠を道綽禪師の『安樂集』から引かれてある『選択本願念佛集』冒頭三百餘字の文に見出す。⁽¹⁵⁾

問曰。一切衆生皆有佛性、遠劫以來應値多佛。何因至今、仍自輪迴生死不出火宅。答曰。依大乘聖教、良由不得三種勝法以排生死。^(以下略)

親鸞は阿彌陀の化身佛と仰ぐ法然上人がその主著の冒頭に是れを引く真意を、未だ佛性を見ざる「不出火宅、信心不定」の凡夫にわが身を重ねて、「信心が佛性」と告げたのではなかったか。信巻に『観経疏』（散善義¹⁶）の文を引き、人間の本性を、

不_レ得_三外現賢善精進之相。内懷_二虚仮、貪瞋邪偽、奸詐百端、悪性難_レ侵、事同_二蛇蝎_一と看做し、又『唯信鈔文意』⁽¹⁷⁾には

具縛の凡夫、屠沽の下類（中略）かやうのあきびと、獵師、さまざまのものは、みないし・かはら・つぶてのごとくなるわれらなり。

と、「凡夫としての機の自覚」に徹する親鸞自身を含めた罪惡深重の人間觀を表明する。このような無佛性の衆生が如来の救済を自身に發現する道を、親鸞は同じく『唯信鈔文意』に、

善惡の凡夫の、みずからが身をよしとおもふころをすて、身をたのまず、あしきころをさかしくかへりみず、また人をよしあしとおもふころをすて、ひとすじに具縛の凡夫、屠沽の下類、无碍光佛の不可思議の誓願、廣大智慧の名號を信樂すれば煩惱を具足しながら无上大涅槃にいたるなり。

と、他力の信心に覺醒することを教示して已まない。さらに『歎異抄』十五章にある如く、

煩惱具足の身をもつて、すでにさとりをひらくということ。この条、もつてのほかのことにせうろう。（中略）

「浄土真宗には、今生に本願を信じて、かの土にしてさとりをばひらくとならいせうろうぞ」とこそ聖人のおおせにはせうらいしか。

と、暗に煩惱具足の衆生の信心獲得以前の佛性内在、即ち天台等の既存佛教に於ける佛性の本具・本有説を親鸞は容認していないことが窺知されよう。要するに親鸞は衆生に如来の信心が覺醒される時に佛性が發現すると捉えたのである。

2、信心佛性の由縁

『唯信鈔文意』⁽¹⁸⁾に、親鸞の佛性觀「涅槃・佛性Ⅱ信心・佛性」の内実を窺う。

涅槃をば滅度・無為・安樂・常樂・実相・法身・法性・真如・一如・佛性といふ、佛性即ち如来なり。この如来、微塵世界に満々たまえり、即ち一切群生海の心なり。この心に誓願を信樂するがゆへに、この信心即ち佛性なり。佛性即ち法性、法性即ち法身なり。

親鸞は、涅槃を法性法身の「涅槃佛性」と受け止め、此の佛性の用きである大悲の誓願を廻向されるところにはじめて発起する信心を「信心佛性」と見定めたのであった。「行巻」⁽²⁰⁾に引く『涅槃經』「獅子吼品」には、

善男子、畢竟に二種有り。一者莊嚴畢竟、二者究竟畢竟なり。一者世間畢竟、二者出世畢竟なり。莊嚴畢竟は六波羅蜜なり。究竟畢竟者、一切衆生得る所の一乘なり。一乘者名付けて佛性と為す。是の義を以ての故に、我一切衆生悉有佛性と説くなり。一切衆生悉く一乘有り、无明覆えるを以ての故に、不能得見。

と、明らかに此処では一切衆生に一乘、即ち佛性が有ることが説かれ、天台は衆生の求道心を喚起させる意図で一切の衆生に佛性本有（本具）を教相とするが、親鸞は「无明に覆われた衆生」を「本願の信心を疑惑する衆生」と看做し、この類の人間が親鸞も含めた大多数である事實に立つて、通佛教の「一切衆生悉有佛性」解釈とは異なる見解、即ち「究竟（出世）畢竟」である証果としての大般涅槃を佛性（如来）と見据え、因位の「莊嚴（世間）畢竟」を他力廻向の「信心佛性」とする佛性觀を確立受容するに至ったのではなかったか。

「真佛土巻」末に⁽²¹⁾

明らかに知りぬ、安養の淨刹は眞の報土なることを顕す。感染の衆生、ここにして性をみることにあわず、煩惱に覆わるるがゆえに。

と、あくまで煩惱具足の身に佛性を当来させない。但、『大經』の本願三信心「眞実信心」によつて廻向される「願作佛心」を「度衆生心」として、親鸞は「唯信鈔文意」⁽²²⁾に

この信樂は衆生をして无上涅槃にいたらしむる心なり。この心すなわち大菩提心なり、大慈大悲心なり。この

信心すなわち佛性なり、すなわち如来なり。

と、唯一煩惱具足の身が本願信樂によつて無上涅槃に至らしめられ、

この信心をうるを慶喜といふなり、慶喜するひとは諸佛とひとしきひととなづく。慶は喜ぶといふ、信心をえてのちに喜ぶなり（中略）信心をえたるひとおぼ分陀利華とのたまへり。

と、信心獲得が分陀利華の大前提であり、親鸞は衆生に於けるそれ以前の佛性存在を語らない。親鸞の佛性觀はあくまで信心を得て「安樂國に到れば、すなわち必ず佛性を顕す」と断じる。親鸞が深重罪惡の衆生を我身に見て、「涅槃……佛性」が衆生に於いて成就するのは、衆生に大悲の誓願を仰ぐ金剛の信心が本願力の廻向に由つて自證されて初めて発現するものであり、それは一切衆生の救済という法藏菩薩の誓願成就と同時同義的性格のものであった。

衆生、未來に清淨の身を具足莊嚴して、佛性を見ることを得ん。

この『涅槃經』⁽²⁴⁾の經文の「未來」が時間的流れのそれでない事は言うまでも無いが、親鸞はこの經文において、他力の信心（因）を以て佛性（果）なりとする「信心佛性」を確かめたのであろう。尚、前に引いた『唯信鈔文意』の「この一切有情の心に方便法身の誓願を信樂するがゆへに、この信心すなはち佛性なり、この佛性すなはち法性なり、法性すなはち法身なり」の論拠は『涅槃經』三十二獅子吼菩薩品の「善男子大悲名爲佛性。」⁽²⁵⁾（中略）大信心者即是佛性」に見出せる。これを『淨土和讃』に、端的に涅槃佛性と信心佛性との關係性と内実を顯すようである。

如来即ち涅槃なり 涅槃を佛性と名づけたたり、凡地にしては悟られず、安養にいたりて證すべし
信心喜ぶそのひとを 如来とひとしときたまふ 大信心は佛性なり 佛性すなはち如来なり

3、如来蔵の眞義

宇井伯壽師は、「如来蔵 (tathāgata-garha) は如来胎であり、如来の胎児である衆生が将来如来と成るものであると見るべきである」と解し、「蔵三義説」⁽²⁷⁾において「衆生が佛性を有するにあらず、佛性が衆生を有している、即ち衆生は佛性の中にあるという意味が如来蔵・胎なのである。」と講述する。つまり一般的解釈とは逆なのだということを開示したのが宗祖の佛性観である。『教行信証』における「阿弥陀佛論・浄土論」に佛性論は不可欠であることは当然であるが、「所撰蔵・能撰蔵・隱覆蔵」三義の最初「所撰の義」には「われらは如来に蔵せられている存在なり、衆生は佛性中の一波瀾に過ぎぬと自覚すべし」と説かれてある事の認識が肝要であろう。高崎師は「親鸞は、佛性とは大信心である、と佛性の大本を信心の中に見出したわけであり、そこに報恩念佛という浄土眞宗の教えが生まれ、佛性の問題を更に突っ込んで考え、追求するところから、新しい鎌倉佛教が起こった」(高崎直道著『佛性とは何か』一四頁法蔵館)と講説し、また「佛性はこの信じるという事を除いてほかに何も無い、その土台があるからこそ発心する」(同六〇頁)と指摘し、又、池田勇諦教授は「私が信心を戴くのではなく、信心に撰め取られ、蔵せられる身になると考えるのが正しい。私の中に蔵せられる信心は高が知れており、またそんな信心は我等を突き動かす力にはならない」と信心佛性の内実を喝破する。

宗祖は「涅槃佛性Ⅱ果、信心佛性Ⅱ因」として、つまり信心に開發される佛性を果上の涅槃の因として、共にそれを如来の用きと見るのであるが、この意味するところは、佛性が人間に内在するという視点ではなく、われらを超えた者(如来の本願)からの我等への用きかけとして受け止められているということ、換言すれば「我らを作佛せしめる用き」として受け止めているという点が確認されなければならない。「佛性」を論じる時、これを対象化して捉えるのではなく、あくまで衆生に現働する用きとして考えなければ、次項で論じる「性起と修起」の關係に於いて、特に眞佛土を窺う上での修起の持つ意義を正しく領解することは困難である。

四、性起と修起の關係性について

1、性起・修起の語意

「織田佛教大辭典」には「性起は縁起にたいする稱。縁起は眞妄和合して起くる諸法故に染淨の差別あり。是れ因位の如来藏なり。性起は唯、眞如法性が自から起こりて諸法となる故に唯淨法、是れ果海の法身なり」と、縁起が修起とほぼ同じ意味で解説されてある。⁽²⁹⁾又、「法藏館 佛教学辭典」には、「理具は本具、理造、性具、性徳等ともいい、本来あるがままに本性として先天的に具えている意。事造は変造、事用、修起、修徳、修具等ともいい本来具えているものが因縁に随つて現れ諸現象をつくるの意。」と、性起・修起に通底する天台の「理具・事造」なる述語として顕わされる。天台宗は性具を説き、華嚴宗は性起を説くという特異點があるとされるが、華嚴宗は唯心縁起の法門にして重々無尽の法界縁起を説き、この縁起の考えを重要視する縁性二起説は華嚴宗の教相（唯心縁起の法門）とされる。

2、華嚴の縁起三種

次に華嚴宗に於ける修起の義を宇井伯寿師「縁起三種」の解釈に尋ねておきたい。⁽³⁰⁾

縁起三種の第一は、縁起は因縁が和合して諸法が現れる因縁生起の義、第二に縁起は化度すべき衆生の機に對してその愚癡迷妄を照らし救済する教えを説く機縁説起の義、第三が、縁起は因縁修起の義、又は方便縁修起の義である。説法教化を因とし、方便に随つて正しく修行して佛果の究竟位に達する、所謂十信・十住・十行・十廻向・十地・等覺・妙覺の五十二の階位は此の為に説かれ、菩薩（因人）はこれを行じて進みつつ、因果行證凡て因縁生

起の道理を體達するゆえにこれを修起の義とする。

さらに性起と修起の關係を窺うに、性起の性は不改、不起の義であり、起は縁起の起を指す、不起である性が因縁によつて起るから縁起であるが、縁起であつてもその性を改めないから性起と言ひ、華嚴宗は縁起は因分（普賢菩薩因人の境界）、性起は果分（毘盧舎那果人の境界）という關係で縁起性起の異同を捉えるようである。縁起の因は性起の果を全うして起り、性起の果は縁起の因を離れないから因果不二門（因果相即門）と称される内実が領解されよう。また、『論註』「淨入願心章」の二種法身説は、性起を法性法身に、修起を方便法身に置き直して觀れば、後述の阿弥陀如来の「在る（果）と成る（因）」という「性起（果）と修起（因）」の關係が、「由生由出」⁽³³⁾の釋意により理解され易い。

3、「性の四義」の教示

次いで『論註』上卷の「性の四義」を尋ねる。（『真聖全』一・二八七頁）

註論に曰く莊嚴清淨功德成就是偈に觀彼世界相勝過三界道故と言えり、此云何不思議なるや凡夫人（中略）又云正道の大慈悲は出世の善根より生ずと。此の二句は莊嚴性功德成就と名づく*。

先ず二十九種莊嚴の總説として一法句に略される「清淨功德成就」⁽³⁴⁾が示され、次いで廣相二十九種功德中、最初に「性功德」の釋文が「真佛土卷」に引かれるところから、『涅槃經』の佛性義に通底する「性功德」を、真佛土を明かす證文として親鸞がここに拈提した必然性と重要性が窺われる。

宗祖は『教行信証』「真佛土卷」に於いて『涅槃經』を多く引き「一切衆生悉有佛性」義を尋ね、次いで『論註』の「性」の四義、⁽³⁵⁾即ち性起・修起説から誓願酬報の眞實報土の相を顯開する。

この『論』『論註』の二句「正道大慈悲出世善根生」を開華院法住師は、

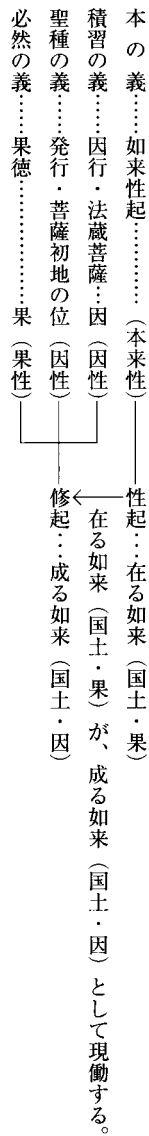
正は真如法性にして性起の義を顕す。道とは法蔵菩薩の智慧のことなり、道と云ひ大慈悲と云ひ出世善根と云ふは、法蔵菩薩の大願大行なり、これ積習の義と聖種性の義とを顕す。生と云ふは安樂浄土の莊嚴の事、即ち清浄平等無為法身の土なり、(中略) 故に生の字に必然・不改の義を具せり。⁽³⁶⁾

と、本義の真如法性の性起が法蔵菩薩の大願大行によつて成就した安樂浄土(性功德成就・修起)であることを明かすが、性起と修起の關係がどのようなものであるかのヒントを提示する。曇鸞は、願生偈の「正道大慈悲出世善根生」を「莊嚴性功德成就」と名づけ、その内実を『論註』⁽³⁷⁾に具さに説く。

性は是れ本の義なり、言ふところは此の浄土は法性に随順して法本に乖かず、事『花嚴經』寶王如來の性起の義に同じ。又言ふところは積習して性を生ず、法蔵菩薩を指す、(中略) 是の性の中にして四十八の大願を發して此の土を修起せり、即ち安樂浄土と曰ふ。是れ彼の因の所得なり、果の中に因を説く故に名付けて性となく。又言ふところは性は是れ必然の義なり、不改の義なり。(原漢文)

「性」とは何かが説かれるが、親鸞は阿彌陀の浄土が「法蔵菩薩修起の性功德」であつて、真如法性が性起した世界であることの証文として此の性四義の釋文を「真佛土卷」に引いていと窺える。本来性という意味で本の義が「性起」として第一に指摘されてあるのは当然ではあるが、性の四義を「真佛土卷」で見るときは、寧ろ因行・發行・果徳の「修起」が真如法性の具体的顯現としての真佛土の証文として前面に出ている。故に此処での第一義はあくまで「修起」であつて、宗祖は法蔵菩薩誓願酬報の佛土を大乘の真如法性の理の具体的顯現、即ち眞の報佛報土として顯開する。高崎直道師は「佛性ありという思想は、佛の教えに対する信を前提にする、まさに佛の教えを信じる事が佛性の始まりであるが、信じたならばそれが片がつく(成佛)というのでなくここから修行が始まるのである」⁽³⁹⁾と信心を解釈し、「成る如來」としての修行即ち「修起」を強調する。右の『論註』の「性四義」を整理すれば次表の如し。前に華嚴の「緣性二起」説「緣起の因は性起の果を全うして起り、性起の果は緣起の因を離れ

ぬ因果不二門（因果相即門）」と対照して「修性二起」の関係を理解したい。



親鸞は独自の佛性論「涅槃佛性と信心佛性」を開顕するが、是れも性起と修起の關係に通底すると考えたい。以上、本来性という意味で本の義が「性起」として第一に指摘されてあるのは当然ではあるが、「真佛土卷」で性の四義を見るときは、寧ろ因行・發行・果徳の「修起」が、眞如法性の具体的に顕現する真佛土の証文として前面に出ている点を確認しておきたい。故に此処での第一義はあくまで「修起」であり、且つ宗祖は法蔵菩薩誓願酬報の国土を眞の報佛報土と明かす。

五、不虛作住持功德の内実

修起に焦点ありとすれば、必然的に虚作ならざる法蔵菩薩因位積習の願果としての不虛作住持功德に展開していく。『高僧和讃』（天親菩薩）の、

本願力にあいぬれば 空しくすぐるひとぞなき 功德の寶海みちみちて 煩惱の濁水へだてなし

は、不虛作住持功德の核心を顕わし、浄土を虚作ならざる住持功德（名號・浄土）⁽⁴⁰⁾、虚作ならざる本願力に住持せられた、人生を空過せざる国土莊嚴（浄土・功德）と表明するが、現代において「浄土とは何か」を考える手掛か

りを、修起としての因位法藏菩薩の本願と、性起としての果上たる如来の神力との相符せる關係を明かす「不虛作住持功德成就」の佛莊嚴に見出せないであろうか。

『論註』上巻では浄土をまず「因願」から、次に下巻でその「成就」から明らかにするとうい、因願と成就という上下二巻から成る。上巻は因位の願心から浄土の莊嚴を問ひ、二十九種莊嚴功德がどうして発せられたかということをお明かす。下巻はそれが成就した事実、果上の佛力から浄土の莊嚴を問うている點をおさえた上で、先ず上巻の「不虛作住持功德」を顕す『論註』の偈文「觀佛本願力遇無空過者能令速満足功德大寶海」を窺う。

此四句名莊嚴不虛作住持功德成就。佛本何故起此莊嚴。(中略)不_レ勉_三途。善星・提婆達多・居迦離等是也。(中略)有_二如_レ是等空過者退没者。是故願言。使_レ我成佛時、值_二遇我者、皆速疾滿足无上大寶_一。是故言「觀佛本願力遇無空過者能令速満足功德大寶海」⁽⁴¹⁾。

これは因願から四句を解釈した文であり、これと対比すれば次に示す下巻の文では、明らかに願果からの解釈であることが分る。又、「成・就」の二字を以て「願・力」に配当して、如来の因位の願に由つて果上の力を獲得したことを「成」、その力が本願通りに用くことを「就」とするが、これより願力と成就の内実が具さに領解される。

「不虛作住持功德成就」者、盖是阿弥陀如来本願力也。乃至言所不虛作住持者、依_二本法藏菩薩四十八願、今日阿弥陀如来自在神力。願以成_レ力、力以就_レ願。願不_レ徒然、力不_レ虛設、力願相符畢竟不_レ差故曰_三成就_一。⁽⁴²⁾

とある如く、親鸞は果上の自在神力と法藏菩薩の因願と、力・願相符う不虛作住持の内実を、性起(涅槃佛性・果)と修起(信心佛性・因)の關係に於いて『論註』上下巻に尋ね、『涅槃經』の佛性義を多く引用して真佛土を明かさんとした意図が窺える。『正信念佛偈』曇鸞讚の偈文に「天親菩薩論註解 報土因果顯誓願」⁽⁴³⁾と、本来浄土成立の因が誓願にあるのは当然だが、報土の因のみならず果も含まれてある點が注目される。これは報土が法藏菩薩積習の果成である事実と、浄土の成立が法藏菩薩因位の誓願を離れて在り得ないことを顕わす。約せば彌陀の浄

土に往生するための因行も證果も共に法蔵菩薩の誓願の然らしむるところなのである。

法蔵菩薩の誓願成就、即ち衆生の往生と成佛について言えば、衆生にとって人生の収まっていく（必至滅度）方向の定まった現在が住正定聚⁽⁴⁴⁾であり、定聚に住したという今の在り様（往生・因）の方向が必至滅度（成佛・果）である。必至滅度は方向（果）であるけれども根拠（因）、根拠（因）であつて方向（果）という関係を約せば、「必至滅度（如・因） 住正定聚（來・果）、住正定聚（來・因） 必至滅度（如・果）」となる。親鸞は法蔵菩薩の誓願を本願他力念佛の機、弘願眞宗の行者に永劫に現働する用きとして捉え、「修性二起」交互成就の關係において真佛土（浄土）の内実を見据えている。然れば色・形・相の無い無形の誓願を有形化した言わば方便としての浄土が、「何処かに在る空間」として考えること自体が全くの妄想であることに気付かされる。願心と佛力の両面からアプローチされた浄土の功德であり有相の方便法身である二十九種の浄土莊嚴は、「在る国土（性起・佛力）が、成る国土（修起・願心）」として衆生に現働する「阿彌陀の色・形・相の無い本願の用きを、かたちで現して衆生に具体的に知らせる手掛かりであることが確かめられる。

六、 結 び

以上のことから、浄土とはあの世にあるとか無いとか、浄土へ行くとか行けないとか、或いは單純に人生の終わりに行くところ等というものではなく、寧ろ本願莊嚴の浄土の功德を賜わつてこの穢土を生きる、却つて「人生の出発点」に見出す世界なのである。換言すれば「人間として生きる原理根拠としての浄土觀に立つ」という趣意が親鸞教学、『教行信証』の教学といわねばならぬことが頷かれるのではないか。法蔵菩薩永劫の積習によつて成就

する因位の本願力（不虛作）に限りなく還つて往く佛道（住持）が宗祖の生涯を貫徹する往生浄土の歩み（功德）であり、そこに於いてこそ真如法性が具体的に修起された浄土の世界として「真佛土」が覚知されるのであろう。念佛を称えて浄土に生まれ、念佛を称えて今浄土を知らされる、浄土の功德に立つて娑婆（穢土）の現実を全うさせられ、生きさせられていくという浄土観、この「不虛作住持功德」に生きる原理を教えるのが浄土真宗であり、浄土思想は決して単純な終末思想ではないことを改めて確かめねばならない。

註(1) 東本願寺二〇〇六年安居本講講録『真実證の廻向成就』一六八頁「因位と果上の不二性」参照

(2) 佛性：阿弥陀佛の得たる大涅槃の妙果、佛陀の本性を言う。即ち「涅槃は即ち是れ無尽なり、無尽は即ち是れ佛性なり」（『大涅槃經』卷五）とある如く、佛性は不生不滅絶対無限の大涅槃という根本的思想である。

(3) 性起：現象世界が諸条件に依存して生起することを「縁起」というのに対して、「性起」は現象世界を真如・法性など究極的な果がそのまま生起した相。次下の修起と共に『華嚴經寶王如来性起品』に説かれる。

(4) 修起：性が不変の本体とすれば修は縁に随つて変化する作用、法の本性に対し人の修行をも意味し「修・性二であつて不二」、修行と法の本性は互いに離れて成立しない意味の「修性（證）不二」を説く。（『十不二門 第三』詳細本論中。

(5) 『真聖全』一・二八七頁

(6) 『真聖全』二・一一〇頁

(7) 第十八願「設我得佛 十方衆生 至心信樂 欲生我國 乃至十念 若不生者不取正覺。唯除五逆 非謗正法。」

(8) 『統真宗体系』第八卷・『教行信証金剛錄』「真佛土卷」一五三頁

(9) 『摩訶止観』卷六「境に就いて法身と為し、智に就いて報身と為し、用を起こすを應身と為す。」（『真宗大辞典七三一頁』）

(10) 『真聖全』二・六三〇頁

(11) 『真聖全』二・六一六頁

(12) 淨影寺慧遠『無量壽經義疏』「義要唯三・撰法身【十二・十三・十七】・撰淨土【三十一・三十二】餘は四十三是れ撰衆生なり。」とある。

(13) 同朋大学大学院文学研究科研究紀要『闍蔵』一・八〇九頁参照

(14) 二〇〇三年 東本願寺安居講録『顯淨土真佛土文類解釈』八六頁

(15) 『真聖全』一・九二九頁

(16) 『真聖全』一・五三三頁

(17) 『真聖全』二・六二八―九頁

(18) 『真聖全』二・六四八頁

(19) 右の「この心」を『假名聖教本』は、「草木国土悉く成佛すととけり。この一切有情の心に方便法身の」と記す。

(20) 『真聖全』二・五九頁、(大正十二・五二四・C、七六九・A)

(21) 『真聖全』二・一四〇頁

(22) 『真聖全』二・六五〇頁

(23) 『真聖全』二・一四〇頁「真佛土卷」未已証

(24) 『涅槃經』迦葉品(大正十二・五六二・C、八〇九・A)

(25) 大正藏十二五五六・C、八〇二・C

(26) 信卷『聖典』二二九頁、『真聖全』二・六二頁

(27) 『佛教汎論』(四四八―九頁)

(28) 漢訳『佛性論』所撰蔵・能撰蔵・隱覆蔵の三義をいう。

(29) 織田佛教大辞典七六七頁参照

(30) 宇井伯寿著『佛教汎論』六九八―六九九頁参照

(31) 唯識修道五位・資糧位・加行位・通達位・修習位・究竟位

(32) 『真聖全』一・三三三―六頁

(33) 国土莊嚴十七句如來莊嚴八句菩薩莊嚴四句^ヲ為^レ廣。入^{真如法性}一法句者為^レ略。何故示^{スル}現^ト廣略相入^ヲ。諸佛菩薩有^二二種法身^一、一者法性法身二者方便法身。由^テ法性法身生^テ方便法身。由^テ方便法身出^テ法性法身。此^レ二法身異而不可分。一而不可同。是故廣略相入^{シテ}統^{シテ}以^テ法名。菩薩若不知^レ廣略相入^ニ則不能^レ自利利他^ニ。『論註』卷下二種法身

- (34) 一法句：清淨功德を指す。佛土の莊嚴二十九種功德を廣相とし「清淨功德」に略するを言う。「廣略相入」
- (35) 性四義：①本の性（『華嚴經』寶王如來性起品：本性から生起する意）、②積習性（積習して成ずる法藏菩薩）、③聖種性（『瓔珞本業經』に菩薩の行位六種性の第四、十地に当り、法藏菩薩發願の位）④必然・不改性
- (36) 『眞眞宗大系』第八卷「金剛錄」（眞佛土卷）一九六頁参照
- (37) 『眞聖全』一・二八七頁、『眞聖全』二・一三三頁
- (38) 『大方広佛華嚴經』卷第三十三「寶王如來性起品」（『大正藏經』第九卷No.二七八、六一二頁中）「如來應供等正覺性起正法不可思議。所以者何。非少因緣成等正覺。出興于世。佛子。以十種無量無數百千阿僧祇因緣成等正覺。出興于世。」以下に十種の因緣が説かれる。
- 又、「如來性起品」の趣意は、「佛子。如來性起正法。一切如來平等智慧光明所起。一切如來一味智慧出生。無量無邊功德」（同六一四頁上）に窺え、法性に隨順し衆生救済の根源法本不乖の淨土「無量無邊の功德」を示教する。「莊嚴性功德成就」の内実であろう。
- (39) 高崎直道著『佛性とは何か』七八頁法藏館
- (40) 『一念多念文意』：「功德」ともうすは、名號なり。（『眞聖全』二・六一七頁）
- (41) 『眞聖全』一・三〇三頁
- (42) 『眞聖全』一・三三一頁、二・一三五頁
- (43) 『眞聖全』二・四五頁
- (44) 正定聚の略：梵語三藐埵尼耶多羅尸（samyakva-niyatarasi）の譯。（『教行信証講義』四一二頁参照）